

[要旨]

ドイツの生活誌研究にみる人間形成への関心 ——教育研究における質的方法論の展開に着目して——

木下 江美

教育の領域で人間形成のありようを論じるにあたり、研究枠組みの再編が試みられるとともに、質的研究方法への関心が高まってきた。また、教授や学習に主要な関心を寄せる教育研究においても、質的方法是近年ますます活発に議論されている。しかし、両者の議論を橋渡しする作業はこれまでのところなされていない。本稿では、教育の領域で論じられてきたライフの経験をあつかう研究（ライフヒストリー研究や生活誌研究）に焦点を当て、この方法が人間形成をとらえる視座に働きかける構造や方法論を考察する。

そのため、人間形成を論じるために教育研究のありかたを検討する作業と、質的研究の方法論の検討をつうじて人間形成という論点を精査する作業の両方に同時に取りくんだ事例として、ドイツの生活誌研究をとりあげる。ドイツでは教育研究のありかたをめぐる議論が1970年代にはじまり、同時に生活誌研究の内部でも教育研究の基礎概念を位置づけなおす作業がなされてきた。ここでは、人間形成のプロセスを語り手の体験に即して理解するという両者に共通の論点が確認された。さらに、質的研究という分野のなかった時期にすでに、生活誌に書かれる現実を主観的な人間形成プロセスの反映とみなす態度が、生活誌の構造や教育と形成という教育科学の構成概念の再検討のなかで論じられていた。

ひとりだちの過程にある主体の主観を論じる生活誌が、教育の領域における人間形成の検討の対象資料・方法となるには、観察可能な現象を取りあつかってきた研究枠組みや構成概念の再編とともに、あらたな枠組みを支える緻密な調査技法も確立される。こういったドイツの事例からは、語る主体のおかれた社会的・歴史的背景をどのように理解し、叙述できるかという人間形成概念のもつ広さに応える方法論の展開が課題として提示される。